

## 植 育

橘 左京 作

ナス、トマト、キュウリ、ピーマン、カボチャ、トウモロコシ、スイカなど、色とりどりの夏野菜を使った料理が我が家の食卓に並ぶ。農家で生まれ育った妻は時々、実家に帰っては旬の野菜をもらってくる。五歳の娘は果肉が赤いトマトやスイカ、粒が黄色いトウモロコシが大好きだ。一方、独特の青臭い風味と苦味があるピーマンは苦手だ。ピーマンはニンジンやグリーンピースなどと共に子供が嫌いな野菜の筆頭に挙げられることが多い。管理栄養士の資格を持つ妻はピーマンの青臭さを取り除こうと料理に工夫を凝らしているが、娘はなかなか食べてくれない。

言葉が理解できるようになった娘に食に関する教育が必要と考え、昨年からは妻と一緒に食育に取り組むことにした。バランスのよい摂取方法、食品の選び方、食卓や食器などの食環境を整える方法は妻に任せることにして、私の方は食料の生産方法や食に関する文化を担当することになった。

我が家で食卓を囲んでいる時に、娘が目の前にある料理を指して、「パパ、どうして○○なの？」を連発して質問攻めに会うことがある。そこで、朝食や夕食時に出された妻の手作り料理に着目して、私が担当する「食料の生産方法」と「食に関する文化」を娘に教えることにした。

私たちが八百屋さんやスーパーで目にする野菜のほとんどは食用にできる部分にカットされて売られている。トマト、さやえんどう、ゴマなどの果菜類であれば果実や若いさや、種子の部分だ。キャベツ、はくさい、キノコなどの葉菜類であれば葉や茎、花の部分だ。だいこん、にんじん、じゃがいもなどの根菜類は根、茎、葉の変形体の部分だ。娘はこれらの野菜が食べられる状態や姿で、突然畑から現れると思っているのかもしれない。そこで「食料の生産方法」については、実際に食料を生産している現場を娘に見せることにした。米や野菜を作っている妻の実家に娘を連れて現場を見せる方法もあるが、いつでも観察できるようにと、我が家で野菜作りを始めることにした。選んだ野菜は娘が大好きなトマトと苦手なピーマンである。娘と一緒に発芽・分化・成長・開花・結実までの生育過程（生活史）を観察することにした。

野菜作りをするにしても住宅街にある我が家には畑に適した日当たり良好な地面がない。そこで車庫前のコンクリート床にプランターを置いて、野菜を栽培することにした。大人のこぶし大にもなる通常のトマトはプランターには不向きなのでミニトマトに変更した。またピーマンの方は、同じ品種のパプリカに変更した。パプリカはピーマンと比べて青臭さや苦みが少ないので娘にも食べてもらえらると思っただからだ。また成熟すると緑から赤、黄、橙と色が変化する様子を観察するのも楽しい。

ホームセンターでプランター二鉢とプランターに入れる培養土、スコップなど野菜作りに必要な資材や機材を買い揃えた。ミニトマトは種をまいて育てることにした。パプリカの方は種を入手できなかったので苗を購入して育てることにした。娘からも手伝ってもらいながら、ミニトマトの種まきとパプリカの苗の植え付けを行った。ミニトマトはプランターの三か所に浅い穴を掘って数粒の種を入れて土をかけた。もう一つのプランターには赤と黄色のパプリカの苗を一本ずつ植えた。最後に水をまいて種まきと苗の植え付け作業は終了した。

苗から始めたパプリカの生育管理は水やりと施肥でよいが、播まきから始めたミニトマトの方は苗に育てるまでが大変だ。子育てに例えれば、苗から始めたパプリカは学校を卒業して社会人としてスタートを切った段階だ。一方、種まきから始めたミニトマトの方は乳幼児、児童、生徒、学生へと大人になるための準備をしている段階だ。朝晩の水やりが私と娘の日課となった。娘と水やりをしながらミニトマトの種が発芽して、徐々に形態を変えながら成長し食用になる赤い実を付けるまでの過程を注意深く観察することにした。ミニトマトの種まきから一週間ほど経って新芽が四、五本出てきた。プランターの真ん中に植えた種からだ。二番目は左側で新芽は一本。一番遅かったのが右側で新芽は二本だ。同じ時期、同じ条件でまいた種なのに発芽の時期がずれてくるのはなぜだろうか。一番たぐさんの新芽が出て成長が早い真ん中の集団は、苗を一本だけを残して間引きをする時期になった。種が入っていた袋の裏には、育児書ならぬ育苗の手引書が印刷されていた。葉っぱが二、三枚出た段階で、一番成長の早い苗を除いて間引くようにと書いてある。一番勢いのある集団だけに一本だけ苗を残すのはもったいないと考え、間引いた数本の苗をポットに移し替えて、プランターの左側と右側の苗の生育状態をみて補充用の苗として残すことにした。

五月上旬に種をまいて育てたミニトマトも二か月経った七月上旬には、支柱で支えた

茎が娘の背丈を超えるくらいの高さにまで伸びてきた。より沢山の日差しを浴びようと四方八方に葉っぱを広げている。いつものように娘と水やりをしにミニトマトのプランターの場所に行ったら、「パパ、青い実がなっているよ」と、娘が声を上げた。葉っぱと同じ黄緑色なので気づかなかったが、確かにミニトマトの実だ。葉っぱの陰に隠れて見えづらくなっていたが、数えてみると数個の実が付いている。青い実が赤く染まり、赤く色づいた実を取って朝食の食卓に並べた。採れたてのミニトマトの味は格別だ。スーパーのミニトマトとは一味違う。

間引いて補充に残した数本の苗は不要となった。どうせ育つことはないだろうと思いつながら日当たりの悪い場所に半畳ほどの畑を作つてそこに移植した。高さが一・三メートルほどある外壁と車庫の壁で日差しが遮られた狭い空間だ。この場所には繁殖力が高く半日陰を好むドクダミが繁茂している。

日当たり良好なプランターに植えたミニトマトと日当たり不良な畑に植えたミニトマトの生育状況を観察してみると面白いことが分かった。なお両者の生育環境の違いは次のとおりだ。

#### ●プランターのミニトマト

- ・日中の日当たりが良好な場所
- ・プランターの下はコンクリートの床
- ・水やり、施肥は頻繁に実施

#### ●畑のミニトマト

- ・外壁と車庫の壁で日差しが遮られた日当たり不良な場所
- ・畑の下は地面
- ・水やり、施肥は時々実施

最初は日当たり良好なプランターのミニトマトの方が、日当たり不良な畑のミニトマトよりも成長が早かったが、劣位な環境にある畑のミニトマトが徐々に勢いを増して、優位なはずのプランターのミニトマトよりも多くの実を付けるようになった。畑のミニトマトは、成長に欠かせない太陽光を求めて上へ上へと背丈を伸ばし沢山の葉を広げた。支柱だけでは支えきれないほどに大きくなったため、急ぎよ棚を作つて巨大化したミニトマトの体を支えることにした。

しかし畑のミニトマトは八月下旬の台風により棚が破壊された。茎がへし折れ葉っぱが枯れるなどの壊滅的な被害ではあったが、棚を修繕したことで奇跡的に回復し九月には更

に多くの実を付けた。一方、プランターのミニトマトの方は車庫に避難させたため台風の被害は免れた。

条件面（生育環境）では不利な畑のミニトマトが、なぜ有利なプランターのミニトマトよりも多くの実を付けることができたのだろうか。畑のミニトマトには逆境（日当たり不良、台風被害）に打ち勝つ底力が備わっていたのではないだろうか。その底力とは何か。畑の土は地面とつながっている。地面は大地へと広がり、その大地は地球を覆う地殻となつて世界へとつながっている。一方、プランターのミニトマトの方は狭い空間に閉じ込められている。しかもプランターの下はコンクリート床のため、底の排水用の穴から出た根が地面へと伸びていけないのだ。

長らく庭（地面）に放置されたままになっていた鉢植えの観葉植物を持ち上げようとしたら地面にひっついて離れなかった。力任せで鉢を持ち上げたところ、なんと鉢の底の小さな穴から根が伸びて地面にへばりついていていた。成長に必要な養分を求めて地面に根を伸ばすたくましい生命力に驚いた。コンクリートで固められた道路に生じたわずかな隙間から芽を出し、茎を伸ばし、花を咲かせている野草を見かけることがある。分厚いコンクリートの下には地面が広がっている。過酷な環境にもめげない野草の生命力と繁殖力を感じさせる。

畑のミニトマトに備わっていたもう一つの底力は、生育に欠かせない光と養分を求めて繰り広げた生存競争だ。半畳ほどの小さな畑に植えられた五本のミニトマトが先を争って太陽光を求めて茎を伸ばし、葉を広げようと競争した。また土の中ではより多くの水分と養分を求めて根を広げようと競争した。厳しい環境条件の下で繰り広げられた生存競争がミニトマトの姿を巨大化させたのだ。

五歳の娘がこれからどのような人生を歩むのかは分からない。娘が社会に出る頃には私は墓の中かもしれない。娘には狭い世界に閉じ籠ることなく広い世界に飛び出して成長してほしいと願っている。世界の表舞台で国籍、言語、人種の壁を乗り越え、様々な人たちと交流し、時には競争（切磋琢磨）して自己の成長に欠かせない知恵と新しいことにチャレンジする勇気を修得してほしいと願っている。二十数年も掛かる子育て期間がわずか五か月ほどのミニトマトの栽培期間に凝縮されていた。（了）